
番外編 テスタロッサ家のご近所さん

たかB

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

番外編 テスタロッサ家のご近所さん

【Nコード】

N2476BA

【作者名】

たかB

【あらすじ】

本編のリリカルなのか？がシリアス続きなので息抜きに書きました。

設定がかなり変化しています。

第一話 テスタロッサ家のご近所さん（前書き）

まえがき

本編のリリカルなのか？がシリアス続きなので息抜きに書きました。

設定がかなり変化しています。

第一話 テスタロッサ家のご近所さん

ツルギ：十五歳。普通の中学卒業と同時にサカサの実験台にさせられている。魔法に対抗すべき電動兵器のテストパイロット。本編と変わらず才能のない馬鹿。フェイトの事を異性として感じ始めていて、時折大胆なフェイトの言動に戸惑う。

サカサの助手（おもちゃ？） と、いう形でミッドの局員として働いている。

フェイト：十四歳。普通の中学生。アリシアのクローン。過去にそれで苦しんでいたがツルギのある一言で払拭。それ以来、ツルギにご執心。その一言を今回の番外編で紹介。：本編にも使う予定。

テスタロッサ一家。

プレシア：シングルマザーで管理局員。研究所の局長。年齢：負傷（作者が）もとい不詳。アリシアが内臓に重傷を負い、フェイトというクローンを作って、フェイトを殺し、その臓器を使い治療しようとしたがツルギとサカサの抗議及び抗戦によりその考えを捨てる。

アリシア：二十歳。プレシアの助手を務めている。フェイトの事を溺愛と言ってもいいほどかわいがる。ツルギとどうにかくっつかないかと避来矢と暗躍することもある。過去に移植しなければ死ぬとまで云われた怪我をサカサに治してもらったことがある。

アルフ・リンス：普通のペット。

月野一家。

サカサ：二十一歳。プレシアの元部下。プレシアとは違う研究所

で局長を務めている。現在、魔力ではなく電動兵器。ぶつちやけISに近い物を作っている。申請するかどうかでプレシアと口論になっている。ツルギの実兄。趣味は機械いじりとツルギいじり。アリシアを瀕死の状態から助け出した天才的な医術の持ち主。普段は管理局の研究者。

避来矢：黒目・黒髪ポニーテールのお嬢様。サカサのスポンサー。イメージはハイスクールD×Dの姫島朱乃。二十一歳。アリシアと仲がいい。独特な喋り方は変わらない。

本人は秘密にしているがサカサに惚れている。

ミネルヴァ：サカサの作ったIS イン○イニット・ストラトスもどき。動力は魔力と電気のハイブリット使用。インテリジェントデバイスのように意思の疎通が可能。まだ、試作段階。イメージは第二次スーパーロボット大戦Zの主人公機ブラスタ。人格は子供っぽい。なぜか避来矢のことを「おとー」と呼ぶ。

ちゅんちゅん。

今日も雀の鳴き声で目が覚める。

私、フェイト・テストロッサの朝は早い。

「…ごはん。作らなきゃ」

昨日はお母さんとお姉ちゃん。そして、珍しく、サカサさんとツルギが揃って研究所から帰ってきた。

本来なら、もう少しゆっくり眠れるんだけどあの四人が揃って朝ご飯を食べるのは久しぶりだから早く準備しないと…。

「むにゃー、フエイト」

体を起こそうとすると隣で寝ていたお姉ちゃんが私の腰に手を回して抱きついていた。

起こさないようにそーっと手を外してベットから出る。

そして、布団をかけ直して一階にあるお風呂でシャワーを浴びてから台所へ向かう。

「…いや、たたらとこはかーぱりっぴしすてむのおゆおうれ」

「ひつほうへーひは…」

お母さんとサカサさんは一階の居間で何やら研究書類の山の中で突っ伏したまま寝ていた。

二人とも寝言で意思の疎通をしている。

サカサさんは母さんの元部下だったけど、魔導師でない人間が魔導師に対抗すべき兵器を作ると意気込んで母さんの研究所を脱退。後に避来矢さんというどこかのスポンサーさんと契約をして独自の研究に務めている。

なんでもため込んだ魔力の結晶を原動力にして使用者のバリアジヤケット。及び、魔法弾なる物を作って、管理局に売り込もうと日々研究を重ねている。時々、ジュエル？ジェイル？なんとかというこれはまた別の研究者の人とよく居酒屋で飲み合うらしい。

母さんの方はというと、サカサさんが作り上げた魔道兵器マジックアーマー。…そのままだね。の設計図を見て討論となり、結局昨夜の遅くまで報告書と設計図の飛び交う羽目になり今に至る。

そつえば、部下の時から無茶ばかりをするとか言っていたような…。

「あ、フエイト。今、起床？」

「うん。おはよう。避来矢お姉ちゃん」

黒い髪を揺らしながら避来矢のお姉ちゃんはリニスとアルフの器にペットフードを入れている。

「謝罪。私、動作。貴女。起床、原因？」

申し訳なさそうに避来矢は頭を下げる。自分が起こしたのではないかと考えているんだろうけどそうじゃないよ。

「ううん。避来矢お姉ちゃんの餌やりの音でじゃないよ。今日はみんなの分の朝ご飯を作ろうと思って…。アルフは？」

お客様でお嬢様なのにサカサさんのスポンサーになってからは家族ぐるみで付き合うようになり、よくうちで寝泊まりをしている。そのため、その動作に堅苦しさは見当たらない。

「ツルギ、アルフ、散歩。又は、徒競走」

「…そうなんだ。じゃあ、みんなが揃う前にご飯を作ろうか」

「私、支援、同伴」

「大丈夫。私がやりたいんだ。みんなに私のご飯を食べてほしいから」

「…了解。私、サカサ、プレシア、書類、整理、移動」

「うん、お願いね」

私が台所で支度を開始し始めると、後ろで母さんとサカサさんを移動させている音と声をBGMに私は袖をまくる。と、

「サカサ、プレシア。起床要求」

「…ほーりよるはまほふ」

「ほーぐーほんはひいら」

「…（怒）」

ブチユギユドル！

居間で聞こえてはいけないような音と二人の悲鳴が背後で鳴り響いた。

「…んあああああああ？！！？」

避来矢！何したの！？

第一話 テスタロッサ家のご近所さん（後書き）

あとがき。

まあ、時々。本編と同時にドンガメ進行でお送りします。

これはリリカルなのか？のIFストーリーー。

二次創作なのにIFもどうよ。と思うこともありますが、ここでは全編コメディー（ラブも含む）かつ、フェイトを主人公に書いていきたいと思っています。

ツルギとミネルヴァ次回に出すよ。

…平和が一番だとつくづく思うよ。

第二話 月野家のお隣さん。 (前書き)

シリウスは一切ない。

コメディー色を目指してドンカメ更新を目指します。

第二話 月野家のお隣さん。

「ノルマ、カンリョーウ」

ネックレスで胸元にぶら下げた小さなビー玉サイズの琥珀色の水晶玉。インテリジェントデバイスもどき。

なんでもどきなのかというとまだ、正式名が決まっていないから。

魔力のない俺でも使える魔法機器デバイスのテストパイロットとしてやってきた。なにやらあべこべなやつだが、中学卒業と共にサカサからミネルヴァを渡されてから早一か月。

ミネルヴァに俺の体の動きを覚えさせる準備期間フィッティングも今日で終えて、明日から本格的に実施訓練及び実験を行う。

俺こと月野剣ツキノツルギはとある事件をきっかけに、知り合ったテストタロツササカサ一家の隣人の居候として、この春から始めた日課のランニングを終えて思い切り背筋を伸ばす。

ミネルヴァから本日のランニング終了の合図を受け取ると俺は立ち止まり、大きく背筋を伸ばす。

「よし、今日の所はここまでにするか、アルフ」

「ワン」

「キタク、キターク」

一緒にランニングした大型犬（本当は狼）のアルフにそう伝えるとアルフは尻尾を振りながらこちらに向かって吠えた。グシグシとオレンジ色の毛並みの頭を撫でると、俺は一度自分の家に戻ることにした。

昨日はサカサとプレシアさん、アリシアさんが何やらギヤーギヤー言いながら帰り道は騒がしいものとなった。内容が俺には難しすぎるから覚えていない。

お隣さんであるアリシアさんは家に帰るなり出迎えたフェイトに抱きつき、姉妹揃ってお風呂に直行した。

お風呂へ向かいながら服を脱いでいくアリシアさんと脱がされていくフェイト。思わず目をそらした。が、

…ばつちり見ました。…姉妹揃って黒だった。似合っていた分、まぶたの裏側に、鮮明に焼きついていていた。おかげで昨夜はなかなか寝付けない夜だった。

アリシアさん。ありがとうございます！

「ムツツリ」

…ミネルヴァの発現に否定が出来ない自分が悔しい。

ちなみにプレシアとサカサはそれに気づかずにテストロッサ家の一階にある居間に戻ってからでも討論を続けていた。

今朝、日課のランニングをしようとしていたら避来矢の姉ちゃんがテストロッサ家に入っていくのが見えた。向こうも俺に気づいて軽く挨拶を済ませると庭の方からアルフが柵の向こうで尻尾を振ってお出迎え。

口にはリードを咥えて。ちゃっかりした狼である。

まあ、迂闊に一人で出れば捕まるかもしれないので俺のランニングにアルフも付き合ってもらうことにした。

帰宅した俺とアルフは驚愕の光景を目にすることとも知らずに。まさか、こんな状況に陥るとは夢にも思わなかった。

「ただいっわあああ！何がっただ、白い書類の上に赤黒い血が！？ミステリー殺人！？」

「きゃんきゃん！」

アルフは俺の背中に隠れるかのように飛び移る。
震えるなアルフ。俺だって怖いんだ。

目の前には血の付いたモーニングスターを肩に担いだ避来矢の姉ちゃんがいた。

あれは悪魔だ。…血の付いたトゲ付き鉄球の先に紫と茶色の長い髪がくっついていた。

謎はすべて解けた！

サカサとプレシアさんは彼女にやられたんだ。

「避来矢は目の前にいる。被害者遺族の名に懸けて！」

「…ツルギ」

「はい！」

「全力防御態勢要請」

「…え、どっいう意味」

「^ハ齒、クイシバレ」

何で!?

「ツルギ、口、禍、^{ワザワイ}元凶」

「クチハ、ワザワイ、ノモト」

どうやら俺は失言をしてしまったようだ。

「…アルフ、俺さ。明日、初めて局員の初めての給料が入るんだ」

「ワフ?」

「フェイトやアリシアさんに夕飯を奢る約束をしているんだ」

「ワフウツ!?!」

「それまで。俺は、死ぬわけにはいかないんだあああああああ
!」

だっ。

クイックターンを行い全速力でこの場を離れる。
今の俺ならウイングロードよりも早く動ける！
だがしかし、

「残念」「ムネン」

しかし、避来矢からは逃げられない。

何故か、自分で逃げ道を塞いだ気がするのは気のせいかな？

「…ごめん。フェイト。…俺、約束。…守れないみたいだ」

「おとこ避来矢、チャント、テカゲンシロヨ」

…ミネルヴァ。折檻をさせないように要求するとかはないのか？

「ツルギ、要求。不許可」

俺はこれからどうなるんでしょうか？

「YOU DEAD」

DEATHよねー。

「あ

」！

ツルギの悲鳴から一分後。

アリシアが寝室から居間の方に来るとそこには三人分の（肉汁）ミートソースのかかったオムライスが準備されていた。とか、どうとか。

第二話 月野家のお隣さん。(後書き)

たかB「誰も死んでいないよ。作者の名に懸けて!」

ツルギ・サカサ・プレシア「「当然だ!」「」」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2476ba/>

番外編 テスタロッサ家のご近所さん

2012年1月8日18時49分発行